

# 令和7年度 良質な医師を育てる研修 脳卒中関連疾患診療能力パワーアップセミナー



「座学はなし」への転換。

現場で生きる“判断”と“連携”を学ぶ

一刻を争う脳卒中診療において、若手医師に真に求められる「現場の動き」とは何か。NHOでは各領域のトップレベルの施設が担当し、実践的なスキルを磨く研修を開催しています。今回は仙台医療センターで開催された「脳卒中関連疾患診療能力パワーアップセミナー」を特集。10年以上の歴史の中で進化を続け、現在は座学から完全実践型へと変貌を遂げた本研修について、講師であり企画の中心を担う江面正幸先生（仙台医療センター院長）にお話を伺いました。

眠っている参加者を見て決意した  
「研修革命」――

NHOには、診療科や疾患単位で構成された十数種類の「良質な医師を育てる研修」があり、それぞれの領域を得意とする施設が企画を担当しています。私が院長を務める仙台医療センターでは、脳卒中分野の担当施設として、もう10年以上前からこのセミナーを実施してきました。しかし、開始当初のスタイルは現在とは全く異なるものでした。当時は講義中心の座学形式だったのですが、ある時、せっかく全国から集まってくれた参加者が講義中に居眠りしている姿を目にし、強烈な危機感を抱いたのです。わざわざ遠方の仙台まで足を運んでもらっているのに、ただ座って話を聞くだけでは、ここに来る意義



がありません。

「これではいけない、面白くない」と痛感し、そこから研修内容の大幅な改革に乗り出しました。まずは血管内治療のライブ見学を取り入れ、実際の手技を見られるようにし、講義の時間を減らしてグループワークを増やしていきました。そして4～5年前、ついに講義を一切廃止し、ライブ見学、ハンズオン、グループワークだけの「完全実践型ス



タイトル」へと完全に移行しました。

コロナ禍においては、「現地で体験することに意味がある」という信念から、あえてオンライン開催は行わず中断していましたが、昨年からはようやく復活し、今年はコロナ後2回目の開催を迎えることができました。

「時間との勝負」を制するための  
「バトンパス」――

本研修で最も伝えたいことは、脳卒中診療は「時間との勝負」であるという点です。例えばt-PA治療（血栓溶解療法）は発症から4.5時間以内という厳しい時間制限があります。

研修医の皆さんにこのセミナーで習得してほしいのは、難しい手術の手技そのものではありません。重要なのは

「自分で治療を完結させる能力」ではなく、「適切な専門家に、最短時間で引き継ぐ判断力」です。

専門医が到着した際、すぐに治療を開始するためには事前の準備が不可欠です。採血結果は揃っているか、ルートは確保されているか、家族への説明は済んでいるか。専門医が判断するために必要な材料（エビデンス）を、いかに早く揃えておけるか。そして、時間がかかる処置をいかに先に済ませておくか。

自分が治療できなくても、「何が必要か」を知り、専門医へ最高の状態でバトンを渡すための準備を整えること。これこそが、脳卒中救急における若手医師の最大の役割であり、本研修で養ってほしい「スキル」なのです。

若手の熱量と全国規模の  
ネットワーク――

今年の参加者の傾向として特徴的だったのは、参加者の年齢層が若年化し、そのほとんどが卒後1～2年目の研修医だったことです。かつては5～10年目の医師も参加していましたが、今年は学年が近かったこともあり、研修中のグループワークやディスカッションも非常に活発でした。

その熱気は研修時間外にも現れており、開催された懇親会には、なんと参加者の大部分が出席してくれました。コロナ前は参加率が半分程度だったことを考えると、驚くべき変化です。体を動かしながらの研修がアイスブレイクとなり、初対面の医師同士でも自然と距離が縮まったのでしょうか。

NHOは全国140病院という巨大なネットワークです。このスケールメリットを活かし、各領域のトップレベルの医師や施設から「いいとこ取り」ができるのが、NHOの研修制度の最大の魅力です。

今回の研修で得た知識と、全国の同期とのつながりを糧に、それぞれの病院で診断能力を向上させ、患者さんを救うための「最速の初期対応」を実践してくれることを期待しています。

## 講師

仙台医療センター  
院長

江面 正幸

PROFILE

出身地：茨城県  
出身大学：東北大学（1986年卒）  
宝 物：子供・ベガルタ仙台  
座右の銘：信じたこの道を  
どこまでも

研修医へオススメの本

信じた道に花は咲く  
https://www.m-book.co.jp/  
product/2485



研修医時代



## VOICE × 受講者

知りたかった後医の思考。専門医の“時間感覚”を肌で学びました！

三重中央医療センター 臨床研修医 1年目 久野 潤一

将来は救急医を目指しており、救急外来で脳卒中患者を診る際、後医となる脳神経外科医が何を考え、何を求めているのかを知りたくて参加しました。

研修を通じて、急性期脳梗塞における「時間感覚」が、専門医と自分とは全く異なることを痛感しました。ただ急ぐのではなく、次の工程へスムーズに引き継ぐための準備や時間管理がいかに重要か、その「バトンパス」の重みを理解できたことが最大の収穫です。

今回は三重県から一人での参加でしたが、学んだ内容は自院の研修医18人全員に共有する予定です。週1回の勉強会で知識を還元し、誰が当直に入っても高いレベルで対応できるよう、病院全体の脳卒中診療の底上げに貢献したいと考えています。



PROFILE

出身地：三重県  
出身大学：三重大学  
（2025年卒）  
宝 物：自分に関わる人達  
座右の銘：才能の差はない、  
熱量の差